東京方言における外来語アクセントの平板化

石山　容崇
（言語文化学部　インドネシア語専攻）

キーワード：東京方言，外来語，アクセント，起伏型，平板型，平板化

0. はじめに

本稿では、東京方言[1]における外来語のアクセントの平板化について扱う。本稿の構成として第 1 節で概説、第 2 節で関連する先行研究に触れた上で、第 3 節で問題提起を行い、第 4 節で調査、第 5 節で考察、第 6 節でまとめと今後の課題について記述する。なお、例文・図表番号、記号、上線などは、特に断りのない限り発表者が施したものである。

1. 概説

第 1 節では、東京方言のアクセント体系と外来語への影響について概説する。

1.1. 起伏型アクセントと平板型アクセント

東京方言に見られる従来のアクセント体系について、松森他 (2012: 8-15, 20-24) の記述を要約する。以下、節の終わりまで要約である。

声の高さをピッチという。次に、音の「長さ」の単位を「拍」といい、おおよそ日本語の文字の 1 つひとつに対応する。東京方言では、語の何拍目の後でピッチが変わるか、という拍の「位置」が、語によって違い、意味の区別にかかわる。たとえば「アメ」では、1 拍目のピッチを高くして 2 拍目を低くすると「雨」になり、1 拍目を低くして 2 拍目を高くすると「飴」になる。このようなピッチの頂点の「位置」の情報のことを「アクセント」と呼ぶ。

東京方言には、大別して 2 つのアクセント体系がある。それを以下の例から見る。上線は相対的に高いピッチで発音される箇所を示す (以下、全て同様に表記する)。

(1) 東京方言の「箸、橋、端」のアクセント

ハシ (箸)	ハシ (橋)	ハシ (端)
ハシ　が…	ハシ　が…	ハシ　が…
ハシ　から…	ハシ　から…	ハシ　から…

(松森他 2012: 14)

東京方言の 2 拍名詞のピッチは、この 3 種類しかない。このように、各方言によって拍数に応じて定まっているピッチのパターンのことを、アクセントの「型」という。

この 3 つの「ハシ」のうち「箸」「橋」は後ろに助詞が付いてもアクセントは変わらない。

[1] ここでは日本語の標準語のもとになっている言語を指す (松森他 2012: 1)。

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

かつ、語の中に急激な下降が現れる。しかし「端」は後ろに助詞が付くと、その助詞も含めた文節全体が高く平板に発音される。前者を「起伏型アクセント」といい、後者を「平板型アクセント」という。平板型アクセントは、現代の東京方言で多くの単語に頻出する。

最後に、何拍目の後でピッチが下がるかという「位置」に関する情報のことを、アクセントの「核」という。東京方言では、核の有無、核の位置が大切な情報となる。

1.2. 外来語のアクセント

次に外来語のアクセントについて、松森他 (2012) の記述を引用する。

> 東京方言では、平板型で発音される語は、和語だけではなく、「アメリカ、フランス、イギリス、ガソリン」などの外来語にも、数多く存在する (中略)。
>
> さらにドラマ、セミナー、スニーカーなど、かつては起伏型で発音されていた語が平板型に次第に変化していく「平板化」という現象も、東京方言で現在進行中だ。
>
> (松森他 2012: 14)

2. 先行研究

外来語アクセントの平板化について先行研究を参照する。2.1 節では平板化と起伏型アクセントの規則について塩田 (2016) を引用する。2.2 節では、平板化の言語内的要因について儀利古 (2011) を要約する。

2.1. 塩田 (2016)

在来語 (＝和語および漢語) には、もともと平板式アクセントのものが多い。(中略) 歴史的に新参者である外来語では、総体として見ると、中高型や頭高型などの起伏式アクセントの語の占める割合が大きく、平板式アクセントの外来語は少数派として位置づけられていた。

一方で、一部の外来語のアクセントが、起伏式から平板式へと変化しつつある (中略)。これは結果的に、その外来語が、在来語の仲間入りをしようとしていることになる (後略)。

また、起伏式アクセントの外来語としては、(音韻環境にもよるが) 後ろから数えて 3 拍めの直後に “下がり目” があるもの (ただし 2 拍語では頭高型) が、安定的な型だとされている。(中略) 後ろから数えて 3 拍めが「特殊拍 (「ン」「—」「ッ」)」の場合には、“下がり目” がその 1 つ前になる。

(塩田 2016: 82-83)

2.2. 儀利古 (2011)

儀利古 (2011) は外来語複合名詞のアクセントについて調査し、平板化が起こる言語内的要因について考察した。20〜30 代の男女 46 名、40〜50 代の男女 19 名を対象に「シカゴカメラ」「アフリカバナナ」といった造語の複合名詞を 2 回ずつ発音してもらいデータを得た。その結果、20〜30 代の若年層において平板型複合名詞アクセントが観察された。そして平

板化が起こる言語内的要因は、複合名詞の後部要素が (1) 2 拍、(2) 重音節[2]構造、(3) 語末特殊拍が撥音であることであると明らかにした。

3. 問題提起

第 2 節では、従来の外来語のアクセントが起伏型から平板型に変化していること、それが若年層において顕著であることを見てきた。さらに、従来の起伏型における規則、複合名詞における平板化の規則を見てきた。

一方で、外来語は年々増え続けており、新しい外来語についてアクセントは十分研究されていない。先行研究と同様のことがいえるか、考察の余地があると考える。

4. 調査

東京方言話者に新しい外来語を発音してもらい、アクセントを確認する。

4.1. 調査対象

対象者は、年代別、男女別に集めた、10 代から 70 代の男女 2 人ずつ、計 28 人である。条件は、言語形成期にあたる 3 歳～小学校卒業時まで東京都内に在住していたことである。10 代～70 代の区分は、2021 年 12 月 31 日を基準として表 1 のように分類した。対象者のイニシャル、性別、生年は、表 2 の通りである。性別は男女順、生年は新しい順にしてある。

表 1: 世代区分

若年層	10 代	2002 年 1 月 1 日～2011 年 12 月 31 日生まれの男女
	20 代	1992 年 1 月 1 日～2001 年 12 月 31 日生まれの男女
	30 代	1982 年 1 月 1 日～1991 年 12 月 31 日生まれの男女
中年層	40 代	1972 年 1 月 1 日～1981 年 12 月 31 日生まれの男女
	50 代	1962 年 1 月 1 日～1971 年 12 月 31 日生まれの男女
老年層	60 代	1952 年 1 月 1 日～1961 年 12 月 31 日生まれの男女
	70 代	1942 年 1 月 1 日～1951 年 12 月 31 日生まれの男女

表 2: インフォーマントの情報

No	年代	名前	性	生年	No	年代	名前	性	生年	No	年代	名前	性	生年
1	10 代	T. N.	男	2005	11	30 代	S. R.	女	1990	21	60 代	F. H.	男	1960
2		S. E.	男	2004	12		K. H.	女	1983	22		I. T.	男	1956
3		F. S.	女	2006	13	40 代	A. S.	男	1973	23		E. T.	女	1961
4		M.H.	女	2002	14		T. Y.	男	1972	24		Y. Y.	女	1959
5	20 代	K. N.	男	1999	15		K. M.	女	1980	25	70 代	E. T.	男	1949
6		Y. Y.	男	1995	16		H. M.	女	1978	26		S. H.	男	1947
7		A. K.	女	1998	17	50 代	I. T.	男	1969	27		K. S.	女	1944
8		A. K.	女	1997	18		K. N.	男	1967	28		A. K.	女	1942
9	30 代	T. A.	男	1987	19		S. A.	女	1970					
10		M. T.	男	1984	20		T. K.	女	1969					

[2] 音節末に特殊拍 (長音、撥音、促音、二重母音の第 2 要素) を含む、2 拍分の音節 (儀利古 2011: 5)。

対象とした外来語は語 1: クラスター、語 2: エビデンス、語 3: ガイドライン、語 4: イノベーション、語 5: タブレット、の 5 つである。これらの語の選出にあたっては、インターネットサイト「最新: カタカナ言葉一覧」から無作為に抽出した。ただし複合語は、単純語とは異なるアクセントの可能性が想定されるので避けた。

この 5 語のアクセントとして 3 つのパターンを想定した。すなわち、英語のストレスアクセントを保持しているアクセント、起伏型アクセント、平板型アクセントである。これらを以下の表 3 にまとめた。なお、起伏型アクセントは塩田 (2016) の規則に基づいている。英語のストレスアクセントは、文字の上に記号 ´ をつけて表記した。

表 3: 英語のストレスアクセントと起伏型アクセント

		英語	英語を保持した場合	起伏型アクセント
【語 1】	クラスター	clúster	クラスター	クラスター
【語 2】	エビデンス	évidence	エビデンス	エビデンス
【語 3】	ガイドライン	gúideline	ガイドライン	ガイドライン
【語 4】	イノベーション	innováition	イノベーション	イノベーション
【語 5】	タブレット	táblet	タブレット	タブレット

語 1 の「クラスター」を除き、英語のストレスアクセントを保持している場合に推測される形と起伏型アクセントは異なることがわかる。

4.2. 調査内容

① 語 1～5 を用いて例文を作り、読み上げてもらう。語単独ではなく文にしたのは、起伏型・平板型のアクセントの区別が、後ろに助詞をつけた時に明らかになるからである。

語 1: クラスターが発生した。　　語 4: イノベーションを起こす。

語 2: エビデンスがある。　　語 5: タブレットを使う。

語 3: ガイドラインを作成する。

② 語の認知度によるアクセントの違いを考慮し、語を知っている、聞いたことはあるが意味が分からない、聞いたことがない、の 3 つに分けて、語の認知度も合わせて確認した。

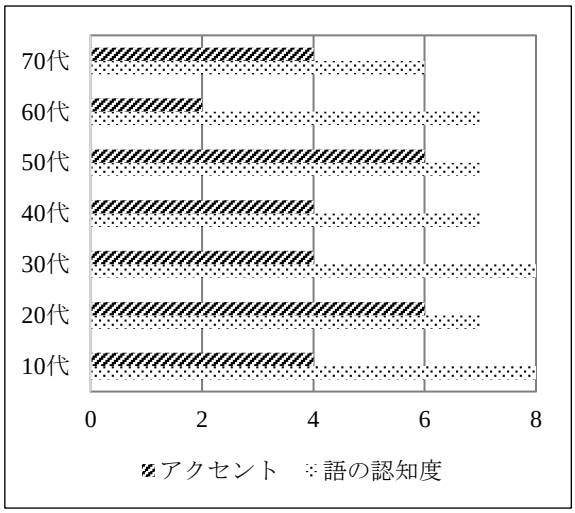
4.3. 調査結果

語 1～語 5 の調査結果をそれぞれの語ごとに数値化し、図 1～図 5 にまとめた。

調査内容①の「アクセント」については、起伏型アクセントで発音した場合 0 点、平板型アクセントで発音した場合 2 点として点数を計算した。たとえば 10 代の 4 人全員が平板型アクセントで発音した場合は 8 点となる。点数が高いほど平板化していることを示す。

調査内容②の「語に対する知識、認知度の高低」に関しては、語を知っている場合を 2 点、聞いたことはあるが意味内容は分からない場合を 1 点、聞いたことがなく分からない場合を 0 点とした。点数が高いほど語の認知度が高いことを示す。

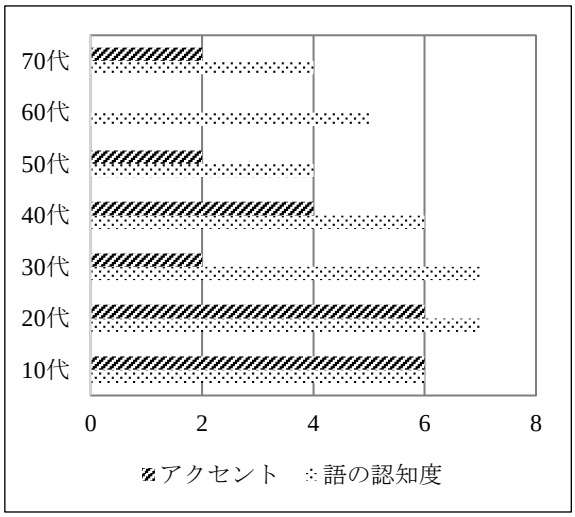
図 1: 語 1「クラスター」の調査結果



アクセントは、表 3 の「クラスター」という起伏型アクセント (英語を保持しているとも考えられる) が多く見られた。一方「クラスター (が発生した)」という平板型アクセントも多く見られた。老年層には起伏型アクセントが多く見られた。

語の認知度に関して、若年層、中年層、老年層の平均はそれぞれ 7.666…点、7 点、6.5 点だった。従って若年層、中年層、老年層の順に認知度が高く、どの年代層も語を認知している人が過半数を占めたといえる。

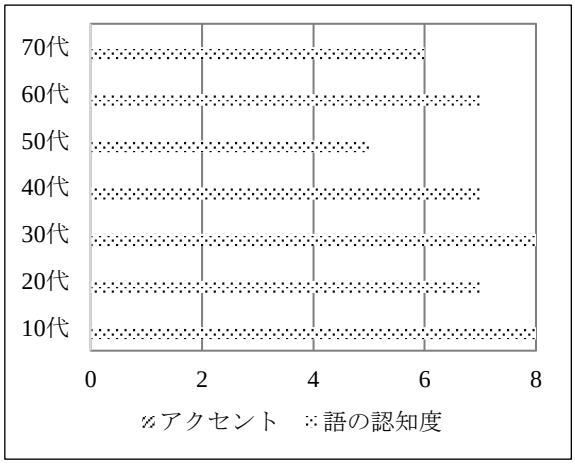
図 2: 語 2「エビデンス」の調査結果



アクセントは、英語のストレスアクセントを保持した「エビデンス」という頭高の起伏型アクセントが多く見られた。しかし 20 代、10 代では「エビデンス (がある)」という平板型アクセントの方が多く見られた。なお 30 代女性 (No.11) と 70 代女性 (No.26) からは「エビデンス」という後ろから 3 拍目に核をもつ、塩田 (2016) に基づいた起伏型アクセントが確認された。

語の認知度に関して、若年層、中年層、老年層の平均はそれぞれ 6.666…点、5 点、4.5 点だった。従って若年層、中年層、老年層の順に語の認知度が高く、どの年代層も語を認知している人が過半数を占めたといえる。

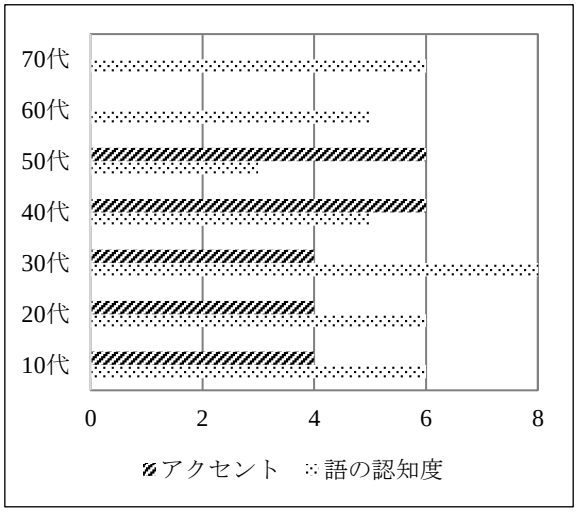
図 3: 語 3「ガイドライン」の調査結果



アクセントは、表 3 の「ガイドライン」という起伏型アクセントだけが確認された。

語の認知度に関して、若年層、中年層、老年層の平均はそれぞれ 7.666…点、6 点、6.5 点だった。従って若年層、老年層、中年層の順に認知度が高く、どの年代層も語を認知している人が過半数を占めたといえる。

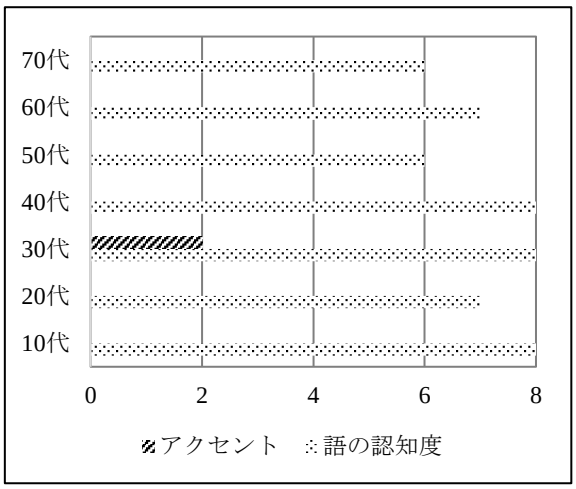
図 4: 語 4「イノベーション」の調査結果



アクセントは、若年層、中年層において表 3 の「イノベーション」という起伏型アクセントと「イノベーション (を起こす)」という平板型アクセントの両方が見られた。中年層では後者が多く見られた。老年層では前者だけが見られた。

語の認知度に関して、若年層、中年層、老年層の平均はそれぞれ 6.666…点、4 点、5.5 点だった。従って若年層、老年層、中年層の順に認知度が高く、どの年代層も認知している人が過半数を占めたといえる。しかし、語 1～5 のなかで認知度が最も低かった。

図 5: 語 5「タブレット」の調査結果



アクセントは、表 3 の英語のストレスアクセントを保持している「タブレット」がほとんどだった。しかし 30 代女性 (No.11) からは「タブレット (を使う)」という平板型アクセントが確認された。

語の認知度に関して、若年層、中年層、老年層の平均はそれぞれ 7.666…点、7 点、6.5 点だった。従って若年層、中年層、老年層の順に認知度が高く、どの年代層も認知している人が過半数を占めたといえる。

5. 考察

4.3 節の調査結果をもとに、新しい外来語についてアクセントを考察する。アクセントが英語のストレスアクセントを保持しているパターン、起伏型、平板型などに分かれる要因として、複数の要素が考えられる。そこで、5.1 節で拍数／音韻／語構成による違い、5.2 節で語の認知度による違い、5.3 節で世代差、5.4 節で男女差その他、インフォーマントの英語使用や英語の習熟度による違いについて、分けて記述する。

5.1. 拍数／音韻／語構成による違い

語 1「クラスター」は従来の起伏型アクセントも見られたが、平板化が進んでいる語と考えられる。アクセントの合計点は 30 点であった。拍数は 5 拍で、語末が長音の特殊拍である。

語 2「エビデンス」は従来の起伏型アクセント、英語のストレスアクセントを保持している形も見られたが、平板化が進んでいる語と考えられる。アクセントの合計点は 22 点であった。拍数は 5 拍である。

語 3「ガイドライン」は塩田 (2016) に従った起伏型アクセントだけが見られ、平板化は確認されなかった。アクセントの合計点は 0 点であった。拍数は 6 拍で語末が撥音の特殊拍である。語構成は 1 語ではあるが、英語に guide と line という 2 つの語があり、それが複合したような形になっている。日本語でも英語をもとにした「ガイド」「ライン」という語が既に広まっている。複合名詞とみなすと、儀利古 (2011) の平板化の条件から外れるため「ガイドライン」は平板化しにくいと考えられる。これは従来の記述と変わらない点であった。

語 4「イノベーション」は従来の起伏型アクセントも見られたが、平板化が進んでいる語と考えられる。アクセントの合計点は 24 点であった。拍数は 6 拍で、後ろから数えて 3 拍目が長音の特殊拍であり、かつ語末が特殊拍である。

語 5「タブレット」は英語のストレスアクセントを保持している形が多く見られたが、平板型アクセントも見られた。これは平板化の兆しと考えられる。アクセントの合計点は 2 点である。拍数は 5 拍である。

以上から「5 拍名詞のアクセントは平板化が進んでいる可能性がある」と考えられる。

5.2. 語の認知度による違い

若年層は新しい外来語の認知度が高く、中年層、老年層となるに従って低くなる傾向が見られる。語 2 では、意味がわかると答えたインフォーマントから平板型アクセントが確認されることが多かった。認知度が高いのは若年層であるため、世代による違いなのか、語の認知度による違いなのか究明するまでに至らなかった。

5.3. 世代差

若年層、中年層はアクセントの平板化が進んでいる。語により、語 1 のように若年層と中年層の平板化の進み具合が同等である場合、語 2 のように若年層がより平板化している場合、語 4 のように中年層がより平板化している場合とある。しかし老年層は、語に関わらず起伏型アクセントが根強く残っている。

5.4. 男女差その他、英語の使用や英語の習熟度による違い

4.3 節では触れなかったが、男女別に調査結果を集計した。語 1 のアクセントの合計点は男性が 18 点、女性が 12 点であり、男性の方が少し平板化が進んでいた。語 2 のアクセントの合計点は男性が 14 点、女性が 8 点であり、男性の方が少し平板化が進んでいた。語 3 は、4.3 節のように同じ起伏型アクセントだけが見られたため、男女差はなかった。語 4 の合計点は男性が 8 点、女性が 16 点で、女性の方が平板化が進んでいた。語 5 は、4.3 節のように 1 人を除いて同じアクセントだけが見られたため、男女差はほとんどなかった。しかし、インフォーマントの母体数が少なかったので、男女差を十分に研究したとはいえない。

その他、英語と日本語の両方を日常的に話すインフォーマント No.7 からは、語 4 に関して「英語の innovation と日本語のイノベーションでアクセントを使い分けている」という意見を伺った。インフォーマント No.7 の語 4 の発音は「イノベーション (を起こす)」のように平板型アクセントであった。外来語としての「イノベーション」は、英語の innovation から離れて日本語化している可能性がある。

6. まとめと今後の課題

以上、新しい外来語のアクセントについて、5 拍名詞のアクセントの平板化が進んでいる可能性があること、若年層、中年層において平板化が進んでいることを明らかにした。

今後の課題として、新しい外来語のアクセントを十分かつ正確に情報収集することが必要である。そのための対策として、第一に、調査対象とする語とインフォーマントの母体数を増やすことが挙げられる。第二に、語の選び方にも工夫が必要である。言語内的条件としては、語の拍数や、特殊拍の有無、単純語・複合語の区別といったそれぞれの分野に特化した研究が求められる。言語外的条件としては、その年の流行語や、政治、経済、文化といったジャンルごとにさまざまな外来語が増えており、語の認知度も世代差や個人差があるため、細かく絞って調査すべきであると考える。

加えて、5.2 節で指摘したように、語の認知度による違い、5.4 節で指摘したように、男女差、英語の習熟度による違いなども、今後正確かつ詳しい研究がなされることを期待する。

参考文献

塩田雄大 (2016)「外来語のアクセントの現況: 在来語化する外来語」日本放送協会放送文化研究所『放送研究と調査』785: 84-102. 東京: 日本放送出版協会.

儀利古幹雄 (2011)「東京方言におけるアクセントの平板化: 外来語複合名詞アクセントの記述」『国立国語研究所論集』1: 1-19.

松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古 (2012)『日本語アクセント入門』東京: 三省堂.

閲覧ウェブサイト

【最新: カタカナ言葉一覧】ロックダウン、クラスターなど新型コロナでも注目 知っておくべき 30 語はコレ - 特選街 web (tokusengai.com). https://tokusengai.com/_ct/17387002 (2021 年 12 月 24 日アクセス).